

目次

はじめに	i
凡例	iii
関連医書の年表	x

森立之研究会の歩み 〈岩井祐泉〉

1

鼎談 〈小高修司(司会)・岡田研吉・牧角和宏〉

15

漢方研究の道を歩き出したきっかけ	17
『太平聖恵方』との出会い	20
『傷寒論』の系譜からみた「康平本」「康治本」	24
古代『傷寒論』と宋代以降の『傷寒論』を見分けるポイント	27
『宋板傷寒論』の成り立ちとさまざまな『傷寒論』	29
『宋板傷寒論』の特徴と研究意義	32

古代の『傷寒論』の姿を残す「不可篇」の存在	35
これまで理解できなかった条文がわかるようになった	39
少陽病、半表半裏と和法について	41
『宋板傷寒論』以降に変化した陽明病の治療方針	43
陽病・陰病に対する治療原則の変遷	45
「陰病には温裏法」という新たな治療方針の誕生	46
研究価値の高い『医方類聚』	50
『傷寒論』が論じる病態変化、「六経提綱証」と「時系列傷寒」	51
用薬の違いから『傷寒論』を検証する	53
発汗剤として用いられていた附子	56
陰病に附子を使うようになったのはいつ頃か	59
虚実の定義について考える	61
『宋板傷寒論』の処方全体からわかること	63
両論併記について	68
『宋板傷寒論』は「痰飲傷寒論」!?	71
『太平聖恵方』巻八の処方全体からわかること	74
条文比較を通して治療方針の変遷を追う	76
くつがえる『傷寒論』の常識①…「主る」「宜し」「属す」に違いはない	79

くつがえる『傷寒論』の常識②…「証と処方は鍵と鍵穴」ではない	81
くつがえる『傷寒論』の常識③…条文が六病位を移動している事実	83
くつがえる『傷寒論』の常識④…「併病」と「合病」に違いはない	86
病態概念を基本とした臨床の優位性	88
麻黄附子細辛湯がよく効く風邪は「直中少陰」ではない	89
もう一つの大きなヤマ、『金匱要略』	92
今後の漢方研究への提言と今後の目標	94
付記…『太平聖恵方』研究の後日談(岡田研吉)	96

各論1 〈岡田研吉〉

旧方に始まる経方の発展	101
旧方を来源とする経方『小品方』	101
『小品方』に登場する名医と、異なる流派の存在	103
1. 阮河南と王叔和	103
2. 阮河南に関する記述	105
3. 『外台秘要方』の記載	106

「苦酢の阮河南」から「辛甘の張仲景」に翻った孫思邈……………108

『宋板傷寒論』の三綱鼎立(桂枝湯・麻黄湯・小青竜湯)について……………111

「三綱鼎立」の否定……………114

「葱白」を用いない「三綱鼎立説」……………115

『宋板傷寒論』に引き継がれた辛甘派——後序の検討……………116

1. 『素問』辛甘発散の説について……………119

2. 四季加減法について……………121

3. 後序の後半部分からわかる、『宋板傷寒論』の特殊性……………122

4. 「後序」の歴史的位置付け——林億(宋臣たち)の文……………125

「辛甘発散法と苦酢発汗法」から「酸甘化陰法」へ……………126

「辛甘発散法と苦酢発汗法」における薬物の歴史の変遷……………127

苦寒薬の大青葉を用いる古典傷寒……………129

『肘後備急方』に書かれる古代の傷寒の治療法……………131

「葱白族三兄弟(葱白・薤白・韭)」の互換性……………140

『医心方』に残る古代の傷寒の治療法……………141

名医・陳存仁の優れた風邪の治療法……………151

奈良時代の韭と葱の使用法について……………153

『宋板傷寒論』の「五辛の禁」について……………154

葱白(および薤白)の用法の変遷……………157

三陰三陽病における用薬法の変遷……………159

1. 『太平聖恵方』巻九傷寒における用薬法……………159

2. 傷寒時系列における大黄……………162

3. 傷寒時系列における杏仁と桃仁……………163

阮河南に代わる現代の白洪竜……………167

『傷寒論』の三陰三陽の変遷……………170

1. 古代から現代にいたるまでの『傷寒論』の系譜……………170

2. 華佗と成無己……………173

3. 古典『傷寒論』から『宋板傷寒論』六経へ……………177

三国時代「魏」の張仲景像……………177

『諸病源候論』と『太平聖恵方』……………179

二種類の厥陰病……………180

1. 「煩満・囊縮」を呈する厥陰病……………180

2. 『宋板傷寒論』の厥陰病……………182

桂枝と附子を用いた発汗法……………184

1. 桂枝湯を用いた発汗法……………184

2. 附子を用いた発汗法と止汗法……………185

漢代の「附子＋桂枝」の発汗法	187
発汗法の桂枝附子湯	190
『神農本草経』における烏頭の効能	191
隋・唐代に始まる「附子の止汗法」	192
『元和紀用経』における桂枝湯、附子の主治と異本校勘について	194
風湿相搏に対する甘草附子湯の発汗即解法	195
附子を用いない例	196
1. 陽虚自汗(五味子＋肉蓯蓉)	196
2. 発汗(烏頭と半夏の相反)	197
『宋板傷寒論』六経における傷寒日期条文の原籍地	199
1. 柴胡剤は三陰病期(少陰病・厥陰病)の処方	199
2. 承気湯は三陰病期(少陰病・厥陰病)の処方	201
六経編次本草における柴胡	203
1. 吐法について	203
2. 昇提作用について	204
3. 和解作用について	205
4. 柴胡の生薬学的変遷	206
『傷寒日期編纂考』	206

『素問』熱論篇を通して『傷寒論』の病態を考える	208
食遣の病態とその治療法	210
陽明病胃家実と厥陰病胃の熱毒	216
痰飲・宿食と「胃家実」	218
1. 王叔和に始まる、痰飲宿食『傷寒論』	218
2. 『医宗金鑑』における「胃家実」と「宿食」	220
『太平聖恵方』巻八における三陽病と三陰病の合病	221

各論2 (牧角和宏)

1. 『宋板傷寒論』(明・趙開美本)について	227
1. はじめに	227
2. 成無己が『注解傷寒論』で行った省略・改変について	229
3. 「趙開美本」の影印について	230
4. 「趙開美本」の復刻・活字化本について	230
5. 『宋板傷寒論』(趙開美本)の構成について	232
6. 弁脈法・平脈法・傷寒例について	234

1.	弁脈法、平脈法、傷寒例が重視されなかった理由の考察	234
2.	不可篇が重視されなかった理由の考察	234
7.	一字低格下条文群について	235
8.	不可篇について	236
9.	結語	238

2. 『傷寒論』のいくつかのテキストについて

1.	はじめに	239
2.	林億らの校訂以前の傷寒論	243
1.	『小品方』に引用された傷寒論	243
2.	『敦煌文書』に引用された傷寒論	245
3.	『諸病源候論』にみる傷寒雑病	246
4.	『医心方』に引用された傷寒論	248
5.	『太平聖恵方』巻八に引用された傷寒論（淳化本傷寒論）	252
6.	『太平聖恵方』巻九から巻十八に引用された傷寒論	255
3.	北宋の林億らの校訂を経た傷寒論	263
1.	『脈経』に引用された傷寒論（『宋板傷寒論』不可篇および『金匱要略』の原本?）	263
2.	『千金要方』に引用された傷寒論（傷寒例と不可篇）	282
3.	『千金翼方』に引用された傷寒論（『唐本傷寒論』）	285

3. 傷寒三陰三陽の病態論について

1.	はじめに	299
2.	漢く隋唐く宋初期のテキストにみる、傷寒三陰三陽の概念	300
1.	『黄帝内経』	300
2.	『諸病源候論』	304
3.	『外台秘要方』および『太平聖恵方』	306
3.	『仲景傷寒論』〔『宋板傷寒論』〕にみる、三陰三陽の概念について	309
4.	『医方類聚』引用文献にみる三陰三陽の治療方針	321
5.	「傷寒」と「時気病」「熱病」「温病」	324
1.	『諸病源候論』	325
2.	『外台秘要方』に引用された『諸病源候論』	327
6.	傷寒・時気病・熱病に対する用薬の違いについて	331
7.	「広義の傷寒」（陽病附子禁忌）と補法（陰病温裏）について	335
8.	文献考証的立場からみた『宋板傷寒論』の臨床的有用性について	337

9. 結語 339

4. 『宋板傷寒論』の特殊性

——三陰三陽篇・不可篇条文の比較検討—— 341

はじめに 341

1. 「属す」「宜し」「主る」の系統…処方指示語句について(その一) 343

1. 「陽浮かつ陰弱」について 345

2. 「属す」「宜し」「主る」などの処方指示語句について 346

2. 桂枝加附子湯は発汗剤? 止汗剤? 付…方指示語句について(その二) 352

3. 第26条白虎加人参湯は本来陽明病篇条文? (条文の前方移動) 357

4. 条文の乗り換え現象 359

5. 「属す」「宜し」「主る」には違いがない? …処方指示語句について(その三) 361

6. 桂枝湯は麻黄湯? …一条文二処方方の例(その一) 363

1. 『宋板傷寒論』における一条文二処方方の例(その一) 363

2. 『千金翼方』でも陽明病発汗を支持している条文 364

7. 承気湯を与えて窺うのは小便? 大便? 365

8. 五苓散は猪苓散…猪苓散の出典は『太平聖恵方』卷十の傷寒中風 367

9. 条文の相対的位置関係から由来を考える 371

10. 三陰三陽篇と不可篇の間の処方互換 …一条文二処方方の例(その二) 375

11. 小建中湯は陽病の処方? 陰病の処方? …厥陰病条文の前方移動 377

12. 『千金翼方』・『宋板傷寒論』間の傷寒病態概念の変化 379

13. 『宋板傷寒論』に特徴的な文字(その一)「鞭」||「堅」 付…併病||合病? 382

1. 「心下痞堅||心下痞鞭」について 382

2. 『宋板傷寒論』に特徴的に用いられている文字とその使用回数 386

3. 「併病」と「合病」に関して 386

14. 「陽明病胃中寒」の説 387

15. 冬陽明・各陽明・陽明病について 388

16. 『宋板傷寒論』に特徴的な文字(その二) …「堅」↓「固」の書き換え例 389

17. 『宋板傷寒論』に特徴的な文字(その三) …「堅」↓「緊」の書き換え例 390

18. 「胃中虚冷」の陽明病とは? …194条と226条 391

19. 231条と232条は、元来一条文? 392

20. 『宋板傷寒論』三陰三陽篇のルーツ 付…一条文二処方方の例(その三) 394

21. 不可篇、『脈経』の一条文二処方方の例(その四) …240条と251条 396

22. 三陰三陽篇の細字注記による、一条文二処方方の表示例 399

23. 不可篇に残された一条文二処方と、陽明病「寒」↓「実」の書き換え? 400

24. 不可篇のみ一条文二処方方の例 402

25.	『金匱玉函經』陽明病収載、『宋板傷寒論』未収載条文(『金匱要略』)	403
26.	不可篇が三陰三陽篇を補う例	405
27.	「陽病発汗、陰病吐下」条文群 vs. 『宋板傷寒論』	407
28.	『太平聖恵方』における「太陽病、其蔵有寒、当温之」の認識	409
29.	「陽病発汗、陰病吐下」の病態論の宋改における書き換え?	410
30.	陰病における下法の適応と不適応	411
	1. 適応を示した条文群	411
	2. 不適応を示した条文群	412
	3. 『太平聖恵方』のみ瀉下法が残る条文の予後	413
31.	陰病の一条文二処方	413
32.	陰病の吐下法について	414
33.	陰病の温裏法(四逆湯)の来源について	418
34.	陽明病の下痢・『外台秘要方』と『諸病源候論』に残存していた文頭	419
5. 『宋板傷寒論』後序について		
1.	はじめに	423
2.	傷寒論後序	426
3.	解説	428
各論 3 (小高修司)		
439		
4.	『傷寒論』後序の作者について	433
5.	結語	433
1. 蘇軾(東坡居士)を通して宋代の医学・養生を考える		
	—— 古代の気候史・疫病史から『傷寒論』の校訂について考える	441
1.	蘇軾の道教(特に内丹法)との関わり	442
2.	宋までの気候・疫病史	443
3.	聖散子方から傷寒と時行寒疫を考える	448
4.	詩詞に見られる蘇軾自身の疾病	454
5.	結語	456
2. 隋唐代以前の用薬法について考える		
1.	発汗祛風薬として用いられた辛甘薬と苦酸薬	462
2.	辛甘派と苦酢派の理論対立	463
3.	附子をはじめとする辛温薬の使用制限	465

4.	麻黄の用法について	470
5.	失われた祛風清熱薬としての苦酸薬	471
1.	艾葉	472
2.	白薇	473
3.	山茱萸と呉茱萸	479

3. 八味丸と六味丸の方意を歴史的に考える

1.	緒言	488
2.	古代における「腎虚」の意味について	489
3.	八味丸について	490
1.	構成生薬の検討	490
2.	処方名の検討	494
3.	方意の検討	496
4.	剤型の検討	501
4.	六味丸について	502
1.	出典および方意の検討	502
2.	構成生薬の検討	503
5.	結語	504

4. 桂枝と桂枝湯を考える

——「陽盛陰虚で禁忌の桂枝」とは		512
1.	桂枝と桂枝湯について	512
2.	承気(湯)之戒について	515
3.	「傷寒例21条」にいう桂枝(湯)とは何か	518
4.	結語	520

5. 五苓散考

1.	緒言	521
2.	五苓散Ⅱ五味猪苓散の略称、原名は猪苓散の説	522
3.	吐法とは何か	526
4.	「傷寒例」条文の諸本との比較検討	530
5.	吐法の猪苓散から治水逆の五苓散へ	534
6.	脈浮である理由	536
7.	五苓散は「痞・結胸」を治する処方	538
8.	結語	539

6. 「留飲・宿食＋風寒邪」の自験から考えたこと

- 緊脈から宋板『傷寒卒病論集』の基本病理を考える……………541
- 1. 病状の経過と考察……………541
- 2. 宿食について……………542
- 3. 宿食の脈について……………543
- 4. 傷寒の浮緊脈について……………544
- 5. 宋板『傷寒卒病論集』の特殊性……………546

7. 柴胡と前胡

——大小前胡湯の存在……………548

- 1. 此胡(柴胡)考……………548
 - 1. 植物形態学から見た「此胡」の検討……………549
 - 2. 「此胡」の諸説のまとめ……………552
 - 3. 効能からの検討……………557
 - 4. 考察……………563
 - 5. 小結……………566
- 2. 柴胡剤の前胡による代替運用(臨床検討)……………566
- 3. 柴胡と前胡の古代本草書にみる比較……………572

8. 敦煌古医籍に見る「肝」の治法について

——『輔行訣臟腑用薬法要』と宋板『傷寒卒病論集』の比較……………581

- 1. 『輔行訣臟腑用薬法要』中にみられる「肝」関連方剤の検討……………582
 - 1. 小瀉肝湯・大瀉肝湯……………582
 - 2. 小補肝湯・大補肝湯……………583
 - 3. 瀉肝湯……………591
 - 4. 養生補肝湯……………592
 - 2. 症例提示……………595
 - 3. 考察……………598
 - 4. 結語……………601
- 4. 唐宋文献に見る柴胡と前胡の使用頻度の比較……………573
 - 1. 大・小前胡湯……………573
 - 2. 各医書中の柴胡と前胡の用いられ方……………574
 - 5. 考察……………576
 - 6. 結語……………577

索引……………(1)